

[別紙 2]

審査の結果の要旨

氏名 中西 三春

本研究は、薬物療法における看護師と医師の連携が行われた精神科急性期病棟入院患者の特徴とアウトカムの向上を明らかにしたものである。くわえて看護師が薬物療法の調整が必要と認識する患者や、その中でも看護師から医師への相談や情報提供を通じて処方変更に至る患者の特徴を検討し、薬物療法における看護師と医師の連携の実態を示した。

本研究では、精神科急性期病棟において、1) 看護師が薬物療法の調整が必要と認識する患者の特徴、2) 看護師と医師の連携が行われている患者の特徴、および3) 薬物療法における看護師と医師の連携が患者のアウトカムに与える寄与を検討した。全国 26 の精神科急性期病棟を有する施設（精神科急性期病棟）、それ以外の国立療養所 4 施設および大学病院 17 施設を 2003 年 11 月 4 日から 12 月 20 日の間に退院した統合失調症患者を対象とした。精神科急性期病棟を退院した患者を、入院中に看護師が処方変更の必要性を認識した必要あり群と、処方変更の必要性が認識されなかった必要なし群とに分類した。さらに必要あり群の中で、看護師が処方変更の必要性を認識したときに主治医に相談や情報提供を行い、かつその後処方変更された患者を、薬物療法における看護師と医師の連携が行われた連携治療群とした。それ以外の、看護師から主治医への相談や情報提供が行われなかった、あるいは相談や情報提供は行われたものの処方変更に至らなかった患者を対照群とした。本研究においては、社会機能および服薬の受け入れの入院時から退院時の改善度をアウトカムと定義した。

まず本研究の主な対象である精神科急性期病棟を退院した患者の特徴を明らかにするために、それ以外の施設を退院した患者と比較した。次に、必要あり群と必要なし群の患者の特徴を比較した。さらに連携治療群と対照群の患者の特徴、および連携治療群と対照群のアウトカム比較を行った。各アウトカムについては、時点（入院時と退院時）と群（連携治療群と対照群）を独立変数とした反復測定分散分析を行い、2 群間の改善度の差を検討した。アウトカムと患者の基本属性および入院治療との間に有意な関連がみられた場合には、その変数を共変量として投入する反復測定共分散分析を行った。

主要な結果は下記の通りである。

1. 精神科急性期病棟を退院した患者を、それ以外の施設を退院した患者と比較した。その結果、精神科急性期病棟の患者は有意に男性が多く、罹病期間が長く、入院時の抗

精神病薬の処方量が高かった。

2. 精神科急性期病棟の中で、必要あり群と必要なし群の患者の特徴を比較した。その結果、必要あり群は有意に看護師に観察された攻撃的行動の頻度が高く、患者の年齢が低かった。
3. 連携治療群と対照群とで患者の特徴を比較した。その結果、連携治療群は看護師が「患者の症状が安定しているから」という理由で減薬の必要性を認識していた者が有意に多く、入院中に服薬指導を受けた者が少なかった。
4. 連携治療群と対照群とで患者のアウトカムを比較した。その結果、連携治療群は入院時から退院時にかけての社会機能の改善が有意に高かった。服薬の受け入れは、連携治療群において入院時から退院時にかけて有意に改善したが、改善度で対照群と有意な差はなかった。

以上、本論文は、薬物療法における看護師と医師の連携と精神科急性期病棟入院患者のアウトカムとの関連を多施設で検討しており、看護師と医師の連携が患者アウトカムの向上に寄与することをはじめ示した点で独創的である。また、薬物療法における看護師と連携が行われた患者の特徴を明らかにしたことは、施設単位で連携を試みるうえでの示唆を与えるという点で、有用性をも兼ね備えており、学位の授与に値するものと考えられた。